



## 阿寒に佇む

美幌医師会  
美幌町立国民健康保険病院

松井寛輔

私が「阿寒湖」に初めて出会ったのは、今を遡ること40年余り前のことでした。私がまだ大学に入ったばかりの頃で、それは渡辺淳一の小説『阿寒に果つ』の中でした。天才的な少女画家である18歳の高校生が阿寒湖を見下ろす峠の一角で自殺する、という話から始まるこの小説は、著者の同級生だった「加清純子」という実在の女性がモデルとされています。この小説に出会い、北海道を訪れたこともなかった私にとって、阿寒湖は遙か遠くの神秘的な湖として心に深く刻まれたのでした。

その翌年、大学2年になった私は、ひとり自転車で北海道一周の旅に出ました。旅の中ほどで道東にたどり着き、美幌峠から弟子屈に下り、さらにそこから阿寒湖まで40kmをひたすらペダルをこぎ続けました。延々と続く登り道を走破し、やっとの思いでたどり着いた阿寒湖でしたが、そこは湖上を観光フェリーが航行し、大型スピーカーから「まりも音頭」が鳴り響く、私のイメージとは余りにかけ離れた観光地でした。その俗っぽさに、私の中の「神秘的湖」は一瞬にして消え去ったのです。

その後、私は全く阿寒湖のことを思い出すこともなく過ごし、医師として50歳代半ばを迎え、自らの第二の人生を考えようとしていました。当時、九州にいた私は、長年憧れていた北海道へ、それも、阿寒湖、屈斜路湖、摩周湖の3つの湖に近く、絶景の美幌峠を有する美幌町の病院へ転勤したいと思い立ちます。そこで、すぐさまその年の秋に面接に訪れました。九州ではこれから紅葉が始まるとういう時期でしたが、美幌にはすでに冬が訪れようとしていました。

美幌町立国保病院での面接を終えた後、レンタカーを借りて夫婦で阿寒湖を訪れました。かつての印象から阿寒湖への期待はありませんでしたが、美幌町の方の勧めで阿寒湖畔のホテルに予約を取りました。11月の道東の夜は早く、九州ならまだ明るい夕方の方の時間にもかかわらず阿寒湖畔に着いたとき、あたりはすでに真っ暗で湖は見えませんでした。

翌朝、まだ薄暗いうちにホテルから出て湖畔に立つと、足元には霜が降りています。肌を突き刺す凛とした冷気に、吐く息は白く一気に身が引き締まります。阿寒湖の湖面は鏡のように風いで、遠くには湖上に霞がたなびき、さらにその向こうにはいまだ

眠りから覚めない黒々とした雄阿寒岳が秀麗な山容を横たえていました。

ひとすじの旭日が雄阿寒岳の山頂を射るや、東雲の空は瞬間に輝きを増し、その彩りを変えていきます。湖畔の葦の繁みでは、一群の白鳥たちが朝の到来を告げるかのように鳴き、同時に冬の始まりをも知らせてくれます。この朝、私は一瞬にして阿寒湖に魅せられ、長く忘れ去っていた小説の中の、自殺した少女の狂気が理解できたようにさえ感じました。

こうして北海道に住み始めて6年、私は幾度となく阿寒湖を訪れ、阿寒の森を散策しています。そして、その散策ルートのひとつに阿寒川があります。阿寒川は、この阿寒湖の東端から発生しており、川岸を歩いて下ることができません。川辺には温泉が湧き出ているところもあり、真冬でもそこだけ凍らないのですぐにわかります。

その中で最も大きい源泉は、かつて雄阿寒温泉と呼ばれていたもので、そこには昭和初期から昭和50年代の初めにかけて大きな木造のホテルが建っていました。しかし、その後ホテルは潰れ、荒れ野原となり、湖畔の温泉街から離れたその場所は、やがて地元の人からもほとんど忘れ去られてしまいました。ところが昨年、そこに近代的なりゾートホテルが建ちました。真新しいホテルの窓からは阿寒川とそれを取り囲む緑の木々が望まれ、湖畔の宿とはまた異なる景観を楽しませてくれます。実は、以前ここに建っていた木造のホテルこそ、文頭で述べた「加清順子」その人が実際に泊まっていた宿だったので。しかも、それは真冬の1月、自殺前日のことでした。

生前から自殺願望が強く2度の自殺未遂をしていた彼女は、このホテルに宿泊し、雄阿寒岳の絵を描き、そして遺作となったその絵をホテルに残しています。自殺当日、彼女はホテルを出て一面真っ白な凍結した阿寒湖まで歩き、その後、釧北峠に向かう道の半ばで多量の睡眠剤を飲んで死んだのです。彼女の「美しく死にたい」という願望は私には理解不能です。けれども、冬の阿寒湖に佇むと、自分が自然と一体になりたいという衝動に駆られてしまうのは何故でしょう。冬の阿寒湖は人を虜にする不思議な力を持っているのかもしれませんが。

